

第4回市中学生ジュニア大会

神戸FC 4年連続 4度目の優勝
千歳SCも大活躍

第4回市中学生ジュニア大会は、7月26日から28日まで、灘中グラウンドで行われ、神戸FCジュニアが4年連続4度目の優勝を飾った。

この大会は、市内中学チームを強化するため4年前から行われているもので、今年は、神戸FC以外にクラブチームとして千歳と北五葉の2チームが出場した。この両チームは市内少年リーグの熱心な指導者によって育成されているもので、小・中ひき続き指導されることによって選手のリベルアップが大いに期待される。ことに、昨年市内少年リーグのチャンピオンになった千歳は好素材がそろっており、神戸FCの好敵手となっている。

今後ますます、学校教育、社会教育あいまって、共存共栄のうちに市内のサッカーレベルが向上することが期待される。

＜1次リーグ結果＞

【Aブロック】①西代②太田③福田
【Bブロック】①神戸FC・A②鷹匠③上野
【Cブロック】①千歳SC②友が丘③北五葉
【Dブロック】①灘②六甲③本山
【Eブロック】①桜が丘②広陵③魚崎
【Fブロック】①神戸FC・B②西落合③塩屋
【Gブロック】①布引②本庄

—第4回神戸市中学生ジュニアサッカー大会—

西代	0		0
神戸FC・A	0	7	0
千歳SC	6	7	0
灘	0		0
桜が丘	2	1	0
神戸FC・B	8	3	0
布引	0		0

中学公認審員も104人誕生

なお、このジュニア大会を利用して、中学生公認審判講習会が行われた。本年度の講習会は、市審判委員会の活動の一環として開かれた。講師は、藤田利明委員長（神戸高専助教授）ほか3名が担当し、3日間にわたり、講義及び実技について充実した講習が行われた。合格者は、次の104名で中学生の市内各大

中国ユース杯

国際大会に参加して

山中 英勇（御影高）

中国ユース杯国際大会のメンバーに選ばれたことを知り、うれしく思った反面、国際ゲームで自分のプレーが通用するかどうか不安だった。

6月15日から18日までと、7月7日から11日まで、高校2年生8人と高校1年生10人、計18人が集まり強化合宿を行った。主にコンビネーションを練習したが、その中でも「基本戦術」について徹底的に行った。パス・アンド・ゴー、フォロー、オープン攻撃など。

7月12日、中国大連市へと向かった。水の問題、コンディション作りが難しく、苦労した。中国へ来たのは2回目、前は日中友好だったので、遊び半分だったが、今度は試合つまり外国人とケンカをしにきたので、注意した。

7月15日、いよいよ開幕。大連というところは、中国代表選手を数多く輩出していて、中国の中でもサッカーの人気はすごくて、観衆4万人の中、上海と対戦した。すごく最初は緊張したが、自分のマークする人はテクニシャンでスピードもある選手だったので、すぐ観衆のことは忘れた。しかし、どちらかにチャンスが生まれると「ワーッ」という大歓声は今もなお覚えている。右サイドバックで出場して粘り強く対応できたことが良かった。後半1点を入れて諸戦を1-0で飾り、今後の自信につながった。

7月19日、地元大連戦。相手のFWは流れ

会において練習として活躍することになる。

【鷹匠】立町・八田【塩屋】戸田・池上【上野】古沢・宮崎・浜崎【六甲】入江・高橋【桜が丘】小崎・大野・倉井【垂水】谷口・小原【鈴蘭台】田中・山口【港島】小林・湊【玉津】大上・山下・峰下・松森【丸山】今碓・長滝谷・七條・前田・松田・小世・笹山【星和台】松浦・島山【竜が台】安藤・神吉・竹中・大和【魚崎】遊木・高橋・東地・日下・堅田【垂水東】青木・杉本・浅見・大柳【友が丘】住・松本・砂山・岩井【高倉】北平・森岡・平山・松本【神大附】文谷・本多【千歳】田村・長谷川・原田・鈴木・斉藤・中島【灘】吉田・木下・井沢・深山・渡辺・沢田・山崎・三宅・天宅【布引】大西・池・羽田・柳生・川西【太田】宮本裕・大谷・宮本圭・久保木・宮城【有馬】林・大南【西代】川千・水谷【西落合】宮谷・福山【須佐野】尾端・岡本【歌敷山】永田・勝矢・石山・入江【福田】中井・村上・橋本・坂田【神戸FC】指股・渡辺・呉山・矢吹・林下【本庄】野崎・水野【広陵】右田・荻野【王塚台】伊藤・島田

—第21回近畿地区高等専門学校体育大会—
(7月21日～23日、神戸高専)

神戸市立	PK 1-3	1		0
和歌山	PK 5-4	0	1	0
大阪府立		0	0	0
明石		0	0	0
奈良		0	0	0
熊野		0	0	0
舞鶴		0	0	0

第20回全国社会人選手権大会関西予選結果
(7月29日～8月19日 大阪：靉、万博、京都：太陽ヶ丘、和歌山：紀三井寺)

神戸FC	2	1		0
和歌山	1	1	0	0
大阪府立	1	1	0	0
明石	1	1	0	0
奈良	1	1	0	0
熊野	1	1	0	0
舞鶴	1	1	0	0

のようなトラップでDFを抜き、とても足が速かった。1点取ると返されるというシーンゲームだったが、相手のミスに助けられたこともあって3-2で勝った。試合で勝ったものの内容では負けていた。この試合も粘り強く対応できたが、自分のパスミスなどからピンチを招いたことは、大きな反省点だった。

7月23日、瀋陽に移り、地元瀋陽に2-0で快勝。ベスト4入りを決めた。

7月25日、エジプト戦。相手は18歳から20歳の選手で、スピード、パワー、テクニックすべての面で日本チームが劣っている思われたが、一つだけ勝てる「インテリジェンス」で勝負に望んだ。相手をおぼせ、あわてさせることで、ディフェンスが粘りに粘って徐々に相手にあせりを見せてきた。後半、日本のシュートがバーに当りおしくも得点にならず、逆に失点して負けた。とても悔しかったが、相手から学ぶことは多かった。FWから守備をしてとても早いついで、中盤ではワン・トラップもしくは、ダイレクトプレーしか出来ないくらいのつめの速さには感心した。

7月28日、3位決定戦、対大連。どうしても3位になって銅メダルを取って気分よく日本に帰りたい。これまで自分でもよくやっている方だと思っていた。1次リーグで戦って、どんなチームか

大日本電線	3	3		0
松下エアコン	0	1	0	0
阪急百貨店	0	1	0	0
伏見蹴友会	2	1	0	0
京都府警	4	3	0	0
紫光クラブB	1	3	0	0
松下電工	1	1	0	0
三菱重工神戸	1	1	0	0
紫光クラブ	2	2	0	0
岩出クラブ	0	2	0	0
神崎高級工機	3	0	0	0
豊崎サッカークラブ	0	0	0	0

おわび

6月号でお知らせしました、兵庫県サッカー協会の新役員の名簿から常務理事で規律委員長の内林恵三氏が抜けておりました。おわび申し上げます。

兵庫県サッカー協会 新役員				
会長	砂田重民			
副会長	赤川公一・瀬川幸一			
理事長	高砂嘉之			
常務理事	吉江経雄・津川昌治			
事務局長	庶務・施設担当			
中村 寿男	(〃 経理担当)	浅堀 保彦		
一北 保五郎	(〃 登録担当)	一北 保五郎		
市川 正	(〃 広報・渉外担当・都市協会委員)	市川 正		
一北 四郎	(〃 企画担当・技術副委員長)	一北 四郎		
藤原 恵	(財務委員長)	藤原 恵		
岡村 敬	(技術委員長)	岡村 敬		
五島祐治郎	(技術副委員長・第1種大学、高担担当)	五島祐治郎		
高橋 敏雄	(審判委員長)	高橋 敏雄		
西村 恵三	(規律委員長)	西村 恵三		
河北 類数	(第1種委員長)	河北 類数		
蔵 力夫	(〃 社会人担当・第5種委員長)	蔵 力夫		
桐原 正記	(〃 社会人担当)	桐原 正記		
藤田 利明	(〃 大学・高専担当)	藤田 利明		
佃 幹夫	(第2種委員長・高校担当)	佃 幹夫		
長田 康規	(〃 副委員長)	長田 康規		
立花 専治	(〃 クラブ担当)	立花 専治		
白石 幸夫	(第3種委員長・中学・クラブ担当)	白石 幸夫		
師田 二郎	(第4種委員長)	師田 二郎		

わかっていて、なんかいやだった。前半から僕は集中を欠き、ぜんぜん粘り強さもなく、おまけに、けがをして途中交代した。これだけが、とても悔に残ったことだった。2-1で勝っていてロスタイムに入っていた。早く終われと思っていたが、同点においつかれ、延長で失点し、結局2-4で負けた。監督さんに「負けたのは、おまえの責任が大きい」(けがをして試合に最後まで出場することができず、みんなに迷惑をかけたので)と言われて、鉄パイプで殴られたみたいに頭に「ガン」ときた。とても悔しく、みんなに申し分けないと思った。

最後に、僕はこの大会に参加して勉強したことは、途中までよくても最後までやりとげなければ、今までやったことはパーになるということ、一番強く考えさせられた。この経験を生かしてもっとがんばってやっていきたい。



株式会社 モルテン
広島 / 東京 / 大阪 / 名古屋 / 福岡 / 札幌

日本サッカーに
ルネサンスは起こるか？(14)

枚方FC 近江 達

格闘技サッカーの好きな日本人。それはひょっとしたら、白兵戦を好み、特攻隊を生んだ日本軍の狂気とも通じるのではないが。欧米の軍隊は、もっと合理的に戦った。

サッカーも、日本は短篇

直感と本能が優先し、遊び——無意味、い

極力損失を避け、勇気だけでなく論理、理知——大げさに言えば、だが——を感じさせる欧州サッカー。

短兵急、疾風の如くゴールに迫りシュート、といったいわば、サワリの連続を求めてやまず、それ以外は無意味だ、という立つ日本サッカーは、同時に、そうした突撃なら、たとえ何十回凡失を重ねようと気にしない。

往々にしてわれわれは、肝心の目的達成よりも勢いとか、形の方を重視する。しかも、その過ちに全く気付かない。いくら失敗しても反省しないのは、突撃はカッコいいし、よくやったと自己満足に浸れるからであろう。

そんな甘さは欧米人にはない。ただただ目的達成だけのために、数回から十数回、次々に正確にパスをつないで敵ゴールに迫り、シュートチャンスをつかもう、作り出そうと粘り強く努力する。この集中と執念の持続は、どうやら、シンフォニーの演奏や長篇小説を書き通すのと同じような性質のものらしい。

そのためか、短い鼻歌の方が性にあうせうかな日本選手は、そういう曲折に富むやり方は、頭脳で理解して実行しようとしても、脂っこい粘り強さが足りず根気が続かず、腰くだけになってしまったり、テンション民族の如く、集中や執念よりも緊張の方が強すぎて、早々と息切れして自壊してしまう。欧米流サッカーがなかなか身につかない原因は、技術、戦術の未熟だけではなく、ほかにもいろいろあるわけである。

戦闘と国民性

本当の勝ち方とは、勝ち得る条件を作っておき、きわめて自然に勝つという勝ち方である。人はそんなとき、誰も責めることはない。それがよいのだ。——会田雄次

スポーツ選手にとって、闘争心は必須不可欠な要素である。試合を見ていると、南米人はきほどではないが、欧州人のそれは、おおむね日本人を上回っているようにみえる。

いかつい体格や精悍な容貌に動作が派手なため、実物以上に見え、われわれの方が内にこもりがちのために、よけい彼らが引き立つところもある。

ハイレベルになると、必然的に、日本ではあまり見られないような勇敢なプレーが要求され、闘争心の強くない選手は淘汰されて、

強いものが残るということもあるだろう。

民族の闘争心について考える資料としては、スポーツ以外に戦争がある。

戦争を知らない人たちは、彼らのスポーツでの闘志溢れるプレーぶりを見て、闘争の極限である戦闘でも彼らは勇敢に戦うにちがいない、と思うだろう。ところがさきにあらず。第二次世界大戦で勇敢に戦ったのは、日本兵の方だったのである。

第一、戦い方が違った。日本兵は、別にカミカゼ特攻隊でなくても、雨あられと飛んでくる銃砲弾の中を敵陣に突入して白兵戦を取行した。それは不変の正攻法であった。

欧米軍は決してそんな危険は冒さない。どうするかと言うと、まず目標の日本軍隊陣に対して、こちらの数倍、十数倍、ときには百倍もの砲撃、爆撃を加えて、十分に相手を殺傷し銃砲を破壊する。

突撃の援護射撃なんて生易しいものではない。その段階で敵戦力の破壊を狙い、ほぼ完全に制圧してしまう。それから初めて、歩兵が直接敵陣に迫る。それもせいぜい敵前2,30メートルまで接近するだけで、手榴弾を投げこみ、自動小銃を撃ちこんでいて、相手がよほどの無抵抗でない限り、すぐにまた後退する。

合理的な彼らにとって、自分から白兵戦を仕掛けるなど、とんでもないことだ。まして、激しい銃砲撃を浴びながら突撃する日本兵にいたっては、勇敢どころか「クレージー」狂気の自殺行為でしかない。負傷して敵前に放置されたとき、彼らは苦痛と恐怖で泣き叫ぶ。だが、日本兵にはそれは皆無で、ひたすら耐え抜いた。

自他ともに人命を大切にしたい欧米軍は、死傷しないように注意しながら戦い、どうしても生きることが無理になったときには、ためらうことなく降伏した。戦闘不能の判定はきわめて甘いものであり、全滅よりもはるか手前で下すのが常であった。

にもかかわらず、決して卑怯と非難されることはなかった。それどころか、善戦して万策つきた結果、やむなく捕虜になったのだから、帰国したとき、最後まで勇敢に戦いぬいた英雄として賞讃され歓迎を受けた。

敵に捕われたものはすべて、日本に帰されたとき、生き恥をさらしたもとして処刑し、重傷による降伏さえ容赦しなかった日本軍とでは、天地の隔りがあった。

このように、両軍の戦いぶりを評価する規準自体、すでに違いがあった。欧米人の戦争は、あくまでも人間的な範囲内での闘争であり、勇敢であった。そこには、スポーツとの共通点さえ明瞭に窮うことができるのである。

非合理的な日本軍隊

軍は精神力が鋼鉄を制したと言うが、日露はほぼ対等の兵器で戦った。精神力が鋼鉄を制したという、そんな時代はかつて一度もなかったのでは

この連載は、雑誌サッカー・ジャーナルに連載されている枚方FCの指導者、近江達氏の随想をサッカー・ジャーナルのご好意で転載しております。
「日本サッカーの発展のためにはルネサンスにも匹敵する人間性の解放が必要である」と、近江氏はいうが…………。

る。どこから、あの奇妙な精神主義が入りこんで来たのであろうか。
——司馬遼太郎

日本軍には、人間の自然なあり方など通じなかった。それどころか。彼らが沙婆(しゃば)と呼んだ俗世間の道理や思想、人情からかけ離れた別世界であることこそ彼らの誇りだった。だから、科学の進歩した第2次大戦でさえ、司令部は兵士たちの生命などほとんど無視して命令を下した。命令を拒否することは不可能で、たとえ死んでもやりとげねばならない。不当な命令のためにおびたらしい数の兵士たちが戦死した。

対照的な両軍の思想は、兵器に関しても一貫していた。

欧米軍は、飛行機や軍艦の装甲を厚くして、弾丸が命中しても致命傷にならぬように絶えず工夫改良を施した。彼らは物量豊かだったので、兵器が惜しいわけではなく、乗員を守るために防御を重視したのである。

一方、日本の飛行機は装甲が薄く、勇名を馳せた零戦でも、攻撃性能を高めるために防備を犠牲にして作られていたので、弾丸が急所に当たると、簡単に燃え上り、名パイロットたちが死んでいった。

さすがに軍艦となると、陸軍や空軍ほどではなかったが、居住性が軽視された。たとえば日本の潜水艦は、乗員は辛うじて寝られる程度の狭い場所しか与えられないために、一、二か月間、作戦行動が続くと、皆、ゲッソリやつてしまう。

だが、欧米のそれには余裕があり、ドイツの潜水艦が三か月かかって日本にやって来たとき、中からそこぶる栄養のいい乗員が元気良く現れたので、出迎えた日本側がびっくりしたという話がある。

どの国の軍隊でも、戦いに勝つためには犠牲が必要であり、苦痛に耐えねばならない、という方針は共通であろう。だが現実に対する取り組み方には大変な違いがある。彼らがあくまでも人間らしさと合理性の枠内で行動し、科学的、総合的に改良を積み重ねていったのに対して、日本軍は正反対であった。

いや、反対と言うよりも、合理性や科学を超越した向う岸にこそ、古今無双の勝者となることのできる活路があると思本気で信じこんでいた。

敗北しても、この信念は変らなかった。反省どころか、ますます狂信の度が増し、最後までそうした戦法戦略が採用された。それには死を怖れず命令だけを忠実に完遂する兵士が必要であり、強兵に洗脳、変身させるスパルタ教育が徹頭徹尾行われた。

彼らが好んだ剣術の極意の一つに「皮を切らせて肉を切る、肉を切らせて骨を断つ」というのがあるが、兵士一人ひとりには、まさに、勝つために相手に切らせる皮であり、肉だったからである。——そして、サッカーも。

明日の栄光を勝ちとれ!

マーカム33

標準小売価格 ¥8,000



80年代をリードする
サッカーウェア

younger

MONTBLANC リアル・スポーツの追求
モンブラン株式会社
神戸・東京・福岡